

Solan Primary School
4th grade news letter

Venture Fourth

2023 Sep. 1

唯一の永久欠番「42」

今日の3時間目。

吉賀先生の図書の授業で「ビブリオバトル」が行われました。

ビブリオバトルとは、「本の紹介ゲーム」のこと。

自分の読んだ本を紹介して、どれだけその魅力が伝わるかを競い合うコミュニケーションゲームです。

私は今回審査員を依頼されたので、初めて4-1の子たちのビブリオバトルを観戦しました。

その中で、村松くんが「黒人差別」をテーマとした本を紹介しました。



多くの子たちは、その発表を聞きながら思ったはずです。

「黒人差別って何？」と。

そして、偶然にもそのビブリオバトルの後の4時間目は「道徳」でした。
鉄は熱いうちに打て、といます。

頭の中に「？」が灯ったこの瞬間を逃すわけにはいきません。

そこで、初めて「差別」について教える事にしました。

ただ、「こんな差別があるんだよ」と紹介するだけでは、学習としては極めて不十分です。

「差別はいけない」ことを漠然と感じるだけではなく、それとどう向き合い、対処していくかということ伝える必要があります。

なぜなら、こうした問題は、あらゆる国や地域に存在するからです。

北海道もそうですし、南の沖縄だってそうです。

日本全体のどこにだって類する差別が存在します。

そして、外国にも数々の差別問題があります。

学校でのいじめ問題も、一つの差別の形だともいえるでしょう。

そこで、差別と闘い乗り越えてきた人々のことを伝えることにしました。

アメリカのプロ野球を「メジャーリーグ」といいます。

そのメジャーリーグにおいて、誰もつけてはいけない背番号、つまり永久欠番があります。

何番だかご存知でしょうか。

クラスで同じ問いを投げたところ、だれも知らない様子でした。

正解は、42番。

では、なぜ42番は永久欠番となったのか。

話は、約70年前にさかのぼります。

その頃のアメリカは、肌や瞳の色で人を差別する「人種差別」が深刻な問題となっていました。

黒人は白人と一緒にレストランで食事をできず、その他の公共施設も黒人と白人で施設が分けられていました。

水道の蛇口。

公園のベンチ。

ホテルなどの宿泊施設。

あらゆるものが、肌の色によって分けられていた現実がありました。

野球の世界も全く同じです。

黒人と白人が同じグラウンドでプレーすることはありえませんでした。

黒人選手はホテルにも宿泊できず、泊まる場所が無い為バスの中で過ごす、

などは当たり前のことでした。

しかし、現在のメジャーリーグではそんなことはありません。

ということはつまり、誰かが最初の扉をこじ開けたことになります。

その選手こそが、「ジャッキーロビンソン」選手。

黒人初のメジャーリーガーです。

ロビンソンが入団したチームは、ドジャースでした。

ただ、入団前からものすごい差別と批判にさらされることは、分かっていました。

入団する前の話し合いの中で、ドジャースの会長はロビンソンに次のように話したそうです。

「君はこれまで誰もやっていなかった困難な戦いを始めることになる。その戦いに勝つには、君は偉大なプレーヤーであるばかりか、立派な紳士でなければならない。仕返しをしない勇気を持つんだ。」

ロビンソンは、もともと短気な人間でした。

ケンカを仕掛けられたら、必ず受けて立つタイプだったそうです。

しかし、真剣に話す会長の言葉に納得し、入団を決意したのです。

入団した彼に対して、会長が心配していた事態が次々と起こりました。

チームメイトは口々に「黒人なんかと一緒にプレーができるか」と怒りました。

「もし一緒にやるなら自分たちはプレーをしない」という請願書も、球団に提出しました。

チームメイトだけではありません。

味方のファンを含む、観客から毎日のように大ブーイングを浴びせられて、物を投げつけられることもたびたびありました。

さらに、相手チームの選手は、セカンドを守っていたロビンソンをわざと狙って滑り込みを繰り返します。

わざと頭や体めがけてデッドボールを投げられることも何度もありました。

ロビンソンは、そのような危険なプレーを仕掛けられて何度もけがを負います。

しかし、それでもぐっと怒りを抑え、野次や嫌がらせに文句も言わずに、黙々と自分のプレーを続けました。

その紳士的な態度と見事なプレーが、少しずつ周りの心を変えていきました。

ある試合で、相手チームが彼に対してひどい暴言を吐き続けた時のことです。

あまりにひどい言葉が続いたので、ついにロビンソンが耐えられなくなって言い返そうとしたとき、彼をかばって抗議した人がいたのです。

それは、あれほど一緒にプレーすることを嫌がっていたドジャースのチームメイトでした。

そのチームメイトに答えようと、ロビンソンはさらに必死に野球に取り組みました。

打席で集中するのはもちろんのこと、チームの誰よりも積極的な守備や走塁を見せました。

その結果、ドジャースは快進撃を続け、その年になんとリーグ優勝を果たしたのです。

ロビンソンは先頭打者としてチームを引っ張り、盗塁王にも輝きました。

得点は2位、ホームランは1位の成績で、新人王にも選ばれました。

その頃には、ファンからの大ブーイングは大きな声援に変わっていました。

その年以降、メジャーリーグの新人王は別の呼び方がつけられました。

「ジャッキーロビンソン賞」です。

彼の影響は野球だけにとどまりませんでした。

その実績は多くの黒人たちに自分を信じる勇気を与え、アメリカを変えていく力にもなったのです。

もうお分かりと思いますが、ロビンソンの背番号こそが42番でした。

逆境に負けずにプレーをした「メジャーリーグ初の黒人プレイヤー」を称えるために、42番は全球団の永久欠番になったのです。

これらのストーリーを、ロビンソン選手を描いた映画を抜粋で見ながら、道徳の授業を行いました。

授業を終えた後、子どもたちは口々に言っていました。

「ロビンソン選手ってかっこいい。」

「とっても心が強い人だと思いました。」

「すごい感動した。」

「俺、なんか野球やりたくなってきた。」

実は、アメリカから遠く離れたこの日本にも、ロビンソンの影響が残っています。

パチョレック、タラスコ、カブレラ、クルーン、ブランコ、ラミレス、ド

ミンゴ、ゴンザレス・・・

野球好きでなくとも、どこかで聞いたことのある名前だと思います。

彼らは、全員背番号42をつけたことのある外国人選手です。(他にも数えきれないほどの選手がいます。)

日本でプレーする、あるいはしていた外国人選手も、ロビンソンの活躍と功績をたたえ、アメリカではつけることのできない「42番」をつける選手が多いのです。

村松くんのビブリオバトルから、素敵な道德の学びが生まれました。

授業後、多くの子たちが

「奏太郎ありがとう！」

と声をかけていました。

そうした子どもたちの姿にも、また爽やかな感動をもらいました。



☆ ↓ 読者ページはこちらから ↓ ☆ ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcipcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

